
MY DEAR AZALEA

穂邑雪奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MY DEAR AZALEA

【NZコード】

N5162J

【作者名】

穂邑雪奈

【あらすじ】

「僕」は人ごみに紛れて、処刑台を見つめていた。
そして罪人としてアザレアが連れてこられる。

許さない。彼女を処刑するなど。

しかし「僕」ときが止められるわけでもない。
だから、「僕」はせめて外套の下で剣を握りしめる。

(前書き)

改行無用です。

さよならはお互に言わなかつた。

人でざわめく処刑場。断頭台は用意済み。数分もすれば罪人も来る。人目につかないよう物陰で息を潜め、僕は外套の下で、隠した剣を強く握り締めた。

こいつらは。

こいつらはアザレアを罪無き罪で死に追いやり、あまつさえ、その死を公衆に曝して汚すつもりなのだ。

許せない。

胸の中でどりどりの感情が煮え繰り返つて行き場を求めている。吐

きそうだ。

アザレア。

愛しい愛しいアザレア。

優しい優しいアザレア。

一国の王子 王位を継ぐことは、まあまず無いだろうが である僕の護衛を長年勤めていた彼女は、先日僕への刺客の接近を許したかどで厳刑に処せられた。職務怠慢だと。

笑わせるな。職務怠慢ならまず、刺客を城に入れた間抜けな番兵どもを、片端から殺してからぬかせ。あれはただの失敗、何年かに一度の不手際に過ぎない。職務怠慢だなんて。アザレアほど僕を愛してこの身を案じてくれるものなど、いないというのに。実の父母ですら、かなわないだろう。

愛しい愛しいアザレア。

厳刑はいつのまにか死刑に変わっていた。僕の減刑の嘆願は無視された。

それほどにアザレアが邪魔か。兄王子を玉座に据えたいがために、僕を消すために。

ああ愛しいアザレア。優しいアザレア。

実の父母さえもくれなかつたこの僕を、愛してくれた唯一の存在。生きるためにすべてを教えてくれた。

『かわいいクレア』

僕を抱きしめ、誰も呼ぶことの無かつた僕の愛称を唯一呼んでくれた人。

『私の小さなクレア』

双子の兄と外見で違う所など無いと言つていいくらいだつたし、規定で二人とも常に同じ装いをしていた。それなのに、一度だつて僕らを取り違えることなく、必ず僕に微笑みかけてくれた。

もつづつと傍にいるけれど、その間僕の命を狙う輩は絶えなかつたけれど、ついあの日までは一度だつて僕に近づけることは無かつた。あの時は、本当に不手際だつただけだ。

『愛しています、クレア』

刺客が来ても、自分で撃退できるようこと武術を教えてくれた。先日役に立つた。

アザレア。

『ああクレア、どこにいらっしゃったのですか！？』

青褪めて泣きそうな顔で飛びついてきたこともあったつけ。勉強が嫌で隠れていたときだ。

『何かあったのではないかと……心配で気が狂いそうでした』

震える腕で僕を抱きしめた。

『あなたなしで私は生きられません、クレア、どうか心配させないで』

アザレア。

寂しがり屋のアザレア。

そんなおまえを僕は一人で逝かせたりはしない。

そつと窺えば、処刑場が一番良く見える特等席に、アザレアの死刑を命じた裁判官。自分が命じた死刑には、立ち会う必要があるからだ。上機嫌で誰かと話している。

アザレア。

決しておまえを一人で逝かせたりはしない。
けれど、おまえが僕に約束させたから。

『私の大切なクレア。たとえ私が死んでも』

僕は今まで、おまえとの約束を破つたことは無いから。これからも
ずっと。

『どうか、あなたは力の限り生きてくださいね』

僕はおまえとともにには逝けない。
ならば。

あの裁判官、死刑執行人、そしておまえの死を見物にきた野次馬ど
も。

力の限り殺してやる。う。

おまえを殺した罪で、おまえを汚した咎で地獄へ行く奴らを嘲笑い
ながらおまえは天国へ行け。

大丈夫。僕に敵うやつは、そうはない。おまえが育てた僕を止め
られるものは、そうはない。だから、僕の暴走を誰かが止める前
に、おまえは道連れだらけになる。数え切れないほど。

ああ、アザレアがやつてきた。

罪人に唯一許された粗末な衣服でも、おまえの威儀は隠せない。おまえの高潔さは奪えない。

背筋を伸ばして、まっすぐ前を見据えて。

ああアザレア。僕の愛したおまえがそこにいる。

そして、

アザレアはふい、どこちらに目を向けた。僕を見つけた。驚いたように目が見開かれ、視線が揺れる。いや、供はない。僕は命じられていた謹慎から、抜け出してきたのだから。泣き出すかのように顔をくしゃりと歪めたアザレア。そして口を動かす。

ありがとう
みおくり

僕も微笑み返したけれど、ちゃんと笑顔になつていただろうか。

ありがとう

礼を言つのは僕の方。おまえがいなければ、僕を愛してくれなれば、僕は今ここにいない。

役人に急き立てられ断頭台へ近づくアザレア。剣の柄を握りなおす。

アザレアの首が落ちたら、惨劇の開始の合図。

ずっと。

ずっとずっとアザレアだけを見つめていた。だから気づいてしまった。

アザレアはもう僕を見ていなかった。けれどそれは多分僕に注意を引かないためで。

猿轡を噛ませれるその直前に。

クレア

そうアザレアの唇が動いたのが見えて。
ふいに涙が滲んで。

おかげでアザレアの死の瞬間を見逃した。

けれども。

湧き上がる歓声が十分合図の役目を果たしてくれた。

ああアザレアアザレア。

愛しい

優しい

アザレア。

さようなはお互い言わなかつたね。
ああアザレア。

愛する僕の育て親。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5162j/>

MY DEAR AZALEA

2011年1月16日05時41分発行